

## フランス語の possible, probable, certain の意味と構文

曾 我 祐 典

### 0. はじめに

発話者が事態の蓋然性について下す評価をフランス語で表すときによく用いる形容詞としては, certain, douteux, évident, impossible, incontestable, possible, probable, sûr, vraiなどを挙げることができる。その中で代表的と見なされることの多いのは, possible, probable, certain の三つであろう。蓋然性の評価を表すときによく用いる統語形式は非人称構文の〈il est X que...〉だが, その場合, possible と他の二者とでは que 節中の動詞叙法に関して差異が認められる。また, 発話者自身に言及する形をとる〈je suis X que...〉の場合は, certain のみが容認される。否定の場合も, possible, probable, certain をめぐってさまざまな差異を問題にしうる。しかし, われわれの知るかぎりでは, 三形容詞を比較対照する論考はこれまでのところ無いようだ<sup>(1)</sup>。本稿は, 認識的モダリティ modalité épistémique のマーカーの用法を解明する研究の一環として, 三形容詞の基本的な意味・統語特性を概観することをめざす。

以下では, 非人称構文の場合 (1), 人称構文の場合 (2), 否定の場合 (3) を順に検討していく。発話例の容認度の判定は, インフォーマントの語感に頼った<sup>(2)</sup>。

## 1. 非人称構文の場合

### 1.1 <il est X de INF>

まず、事態を不定法表現で表し、蓋然性に関する評価を三形容詞によって述べる非人称構文の発話を構成することがあるかどうか考えよう。

たとえば、「彼女が明日来ること」「彼女が花粉症であること」という事態が「ありうる」「ありそうだ」「確実だ」と言おうとする場面では、インフォーマントによれば (01), (02) は容認されない。

(01) (Cécile va beaucoup mieux maintenant.) Il est \*possible / \*probable / \*certain de venir demain.

(02) (Cécile éternue tout le temps.) Il est \*possible / \*probable / \*certain d'être allergique aux pollens.

それは、「来る」「～である」という事行の主体を表示しない“de venir demain” “d'être allergique aux pollens” では「彼女が明日来ること」「彼女が花粉症であること」という事態が表せないためであると考えられる。

それなら、次の (03) はどうだろうか。代名詞 lui によって「来る」という事行の主体が Cécile であることが示唆できそうに思われるが、事態の蓋然性の表現としてはやはり容認されない。

(03) (Cécile va beaucoup mieux maintenant.) Il lui est \*possible / \*probable / \*certain de venir demain.

それは、代名詞 lui が表すのは「彼女にとって」であり、(01), (02) と同じく「彼女が明日来ること」を不定法表現“de venir demain”では表せないためであろう。もちろん、「来る」という事行が「(彼女にとって) できる」や「(彼女に) 許されている」ということを伝えようとする場面になら、“Il lui est possible de venir demain.” は適合する。また、次の (04) と「できる」「してよい、許される」が考えにくい事行を含む (05), (06) についてのインフォーマントの判定からも、<il lui est possible de INF> が、事態について「ありう

る」を表すときではなく、事行について「できる」「許される」を表すときに用いる表現形式であることが分かる。

(04) Il lui est possible d'utiliser leur bureau pendant toute leur absence.

(05) \*Il lui est possible de se tromper de date de rendez-vous.

(06) \*Il lui est possible d'être allergique aux pollens.

一方、「人（人々）が～すること、～であることがありうる／ありそうだ／確実だ」といった人間一般を含む事態の蓋然性の場合なら、事行の主体を表示しない〈il est X de INF〉で表せそうに思われる。しかし実際には、たとえば「（人が）約束の日を間違ふこと」や「（人々が）花粉症であること」といった事態の蓋然性の評価を表そうとする場面を想定すると、インフォーマントは(07), (08) のような発話を容認しない。

(07) Dans de telles circonstances, il est \*possible / \*probable / \*certain de se tromper de date de rendez-vous.

(08) Il est \*possible / \*probable / \*certain d'être allergique aux pollens.

やはり、主体を表示しない表現法は容認されないのである。まして、「できる」「してよい、許される」が考えられる事行を含むために解釈の紛らわしさをともなう「（人が）それらの表現を漢字で書くこと」「（人が）怒りを爆発させること」のような事態の場合に、蓋然性の評価を表そうとして(09), (10) のような発話を構成することはない。

(09) Au Japon, il est \*possible / \*probable / \*certain d'écrire ces expressions en caractères chinois.

(10) Dans de telles circonstances, il est \*possible / \*probable / \*certain de laisser exploser sa colère.

以上から、「…が～すること、…が～であること」という事態の蓋然性に関する評価を表す場合に、三形容詞を用いて〈il est X de INF〉の発話を構成することはないと言える。「～する、～である」という事行について「（…にとって）できる」や「（…に）許されている」を表す発話としてなら、〈il (lui) est possible de INF〉は容認される。

## 1.2 <il est X que...>

肯定の平叙文の場合、一般に、<il est possible> は接続法節を、<il est probable> と <il est certain> は直説法節を従える。

(11) Il est possible que Michel ait parlé avec le responsable.

(12) Il est probable / certain que Michel a parlé avec le responsable.

<il est possible> については、COHEN (1965, p. 135), TOGEBY (1982, p. 79) なども指摘するように、ごくまれに (13) のような直説法節を従える発話例も観察される。発話者の、事態を現実の時間の流れの中に位置づけつつ提示する意図がきわめて強い場合であろう。

(13) Il est possible qu'un avenir plus ou moins éloigné fera automatiquement intervenir la solution. (COHEN 1965, p. 135)

また、<il est probable> については、COHEN (1965, p. 135), TOGEBY (1982, pp. 83-84), HUOT (1988, p. 63) その他多くの研究者が指摘するように、少なくとも (14) のような接続法節を従える発話例も観察される。発話者が事態に関して下している蓋然性の評価を伝えることに力点を置き、その分、事態を現実の時間の流れの中に位置づけて表そうとする意図が弱い場合であろう<sup>(3)</sup>。

(14) Il est probable que vous refusiez ma succession. (TOGEBY 1988, p.63)

ここで、<c'est X> に触れておこう。CHARAUDEAU (1992, p. 232) の指摘をまったくなく、<c'est X> を <il est X> と同じように用いる場面があることは次の (15), (16) のような発話例からも明らかである。

(15) a. Il est possible que le cadeau ne lui ait pas plu.

b. C'est possible que le cadeau ne lui ait pas plu.

(16) a. Il est probable / certain que les négociations n'ont pas abouti.

b. C'est probable / certain que les négociations n'ont pas abouti.

しかし、(15'), (16') からその一端がうかがえるように <c'est X> は <il est X> に比べてはるかに統語的制約がゆるやかであり、後ろに節を従えない <c'est X> の形でそのまま発話として成立しうる。

(15') a. \*Que le cadeau ne lui ait pas plu, il est possible.

b. Que le cadeau ne lui ait pas plu, c'est possible.

(16') a. \*Que les négociations n'aient / ont pas abouti, il est probable / certain.

b. Que les négociations n'aient / ont pas abouti, c'est probable / certain.

また、(15)、(16) のように両者が競合する場合でも、さまざまな差異を問題にしうる。たとえば、〈c'est X〉が「ふつう」または「くだけた、やわらかい」言葉づかいの場面で多用されるのに対して〈il est X〉は「あらたまった、かたい」という印象を与えることが多いという文体的な差異がある。〈c'est X〉の ce は、本来、発話者がコミュニケーションの場でなにかを指し示す動作に対応する語であり、その意味で〈c'est X〉は発話者と密接に結びついている表現である。これに対し、〈il est X〉の il は定義により何も受けておらず、その意味で発話者との結びつきは不在である。発話者は自分と断絶した形で蓋然性に関する評価を表す態度をとっており、それだけ高度な抽象化の操作を前提とする表現法である。これが「あらたまった、かたい」という印象を与える要因であると考えられる<sup>(4)</sup>。

## 2. 人称構文の場合

### 2.1 〈SN est X〉

人称構文としてはまず、事態を名詞連辞で表し、それを主語として発話を構成する場合について考えよう。

たとえば、Cécile という人物について「彼女が参加すること」「彼女がそのポストを手に入れること」という事態をそれぞれ動詞派生名詞を含む “sa participation” “l'obtention de ce poste” で表し、事態の蓋然性に関して「ありうる」「ありそうだ」「確実だ」という評価を伝えようとする場面を想定すると、三形容詞とも容認される。

(17) Comme elle est complètement guérie, sa participation est maintenant possible / probable / certaine.

(18) (Cécile est très compétente en la matière.) L'obtention de ce poste est donc

possible / probable / certaine.

事態を名詞連辞で表すことには語彙的制約に加えてアスペクト・モダリティ・テンスなどの表現にかかわる困難がともなうこともあって、蓋然性に関する評価を〈SN est X〉の統語形式で伝えることはあまり多くないようだ。

## 2.2 〈je suis X de SN / de INF / que...〉

発話者自身に言及する形をとる〈je suis X de SN〉の場合は, certain を用いる発話のみが容認される。

(19) Je suis \*possible / \*probable / certain de sa participation.

(20) Je suis \*possible / \*probable / certain de son obtention de ce poste.

その理由は、三形容詞の基本的意味に求められる。人（この場合は発話者自身）を話題にして事態の蓋然性に関する評価を表す機能は possible も probable ももっていないのである。実際、ラテン語の *possibilis* に由来する possible は、語義が *Trésor de la Langue Française* (TLF) で (21) のように記述されているように、事態・事行・物について「ありうる」を、事行について「できる」を表すのを基本的な機能としている。

(21) (Gén. en parlant d'un fait, d'un événement, d'une action) Qui peut être, exister, se produire ; faisable, réalisable

また、ラテン語の *probabilis* に由来する probable は、語義が TLF で (22) のように記述されているように、事態について「ありそう」を表すのを基本的な機能としている。

(22) (En parlant d'un événement, d'un phénomène) Qu'il est raisonnable de supposer, de conjecturer, de prévoir ; qui a beaucoup de chances de se produire

これに対して、民衆ラテン語の *certanus* に由来する certain は、語義が *Grand Robert* (GR) と TLF で (23) のように記述されているだけでなく *Dictionnaire Historique de la Langue Française* (DH) と GR で (24) のようにも記述されており、事態について「確実」を表すのを基本的な機能としつつも、人について「(事態を) 確信している」を表す機能をあわせもっていると言える。

- (23) Qui ne fait pas de doute ; qui est l'objet d'une adhésion intellectuelle, d'un sentiment assuré de vérité (GR)

Qui ne fait pas de doute, qui est conforme aux critères de la vérité (TLF)

- (24) Le mot signifie *sûr, convaincu* en parlant d'une personne (DH)

(Personnes. Surtout attribut) Qui considère une chose pour vraie (GR)

それでは次に、不定法表現を含む〈je suis certain de INF〉の形式の発話例を検討しよう。(25)－(27)は、いずれも「自分が～すること、～であること」について確信を表そうとする場面での発話として容認される。これは、木下(1989, p. 42)も指摘するように、不定法表現が表す事行の主体(発話者自身)を文主語 je によって示唆することができるためであると考えられる。

- (25) Je suis certain de réussir cette fois.

- (26) Je suis certain d'être allergique aux pollens.

- (27) Je suis certain d'avoir rencontré cette fille chez Alain.

最後に〈je suis certain que...〉の形式だが、次の(28)－(30)は、いずれも「自分が／あなたが～すること、～であること」について確信を表そうとする場面での発話として容認される。非人称構文の〈il est certain〉と同じく、肯定の平叙文の場合、〈je suis certain〉は常に直説法節に従える。発話者が事態を現実の時間の流れの中に位置づけつつ提示する意図をもっているからであると説明できる。

- (28) Je suis certain que je réussirai / que vous réussirez cette fois.

- (29) Je suis certain que je suis allergique / que vous êtes allergique aux pollens.

- (30) Je suis certain que j'ai rencontré / que vous avez rencontré cette fille chez Alain.

〈je suis certain que IND〉と非人称構文の〈il est certain que IND〉は、事態を表す節表現にモダリティ・マーカーが先行するという共通点をもっている。差異は、もちろん je / il の対立に求められる。〈je suis certain que IND〉の場合は、(certain が本来、事態について確実さを表すのを基本的機能としている分だけ知的操作を要する表現法であるとしても) 蓋然性の評価主体である自分

を je を用いてそのまま表示するモダリティ・マーカという意味で、素朴な表現態度と言えよう。これに対して、〈il est certain que IND〉の場合は、上の 1. 2 の最後でも述べたように、自分との結びつきをなんら喚起しない非人称の il を用いて自分と断絶した形をとるという意味で、かなりの知的操作を要する表現態度と言える。〈je suis certain que IND〉は certain を含むために「ややあらたまった、かたい言葉づかい」という印象を与えるが、〈il est certain que IND〉はそれ以上に「あらたまった、かたい言葉づかい」という印象を与えるようだ<sup>(5)</sup>。

### 3. 否定の場合

#### 3. 1 possible

事態の蓋然性について「ありうる」という評価を下していないことを表すとき、しばしば possible を含む否定文 〈il n'est pas possible que SUB〉〈SN n'est pas possible〉を用いる。事態についての表現としては、不定法表現を含む 〈il n'est pas possible de INF〉は用いない。

(31) Il n'est pas possible que ses parents soient au courant.

(32) (Cécile est toujours souffrante.) Sa participation n'est donc pas possible.

(33) #Dans de telles circonstances, il n'est pas possible de laisser exploser sa colère.

impossible を含む肯定文 〈il est impossible que SUB〉〈SN est impossible〉を用いることもある。事態についての表現としては、不定法表現を含む 〈il est impossible de INF〉を用いることはない。

(31') Il est impossible que ses parents soient au courant.

(32') (Cécile est toujours souffrante.) Sa participation est donc impossible.

(33') #Dans de telles circonstances, il est impossible de laisser exploser sa colère.

論争的な場面では、(31)、(32) のような否定文の方をよく用いる傾向があるようだ。



### 3. 2 probable

事態の蓋然性について「ありそうだ」という評価を下していないことを表すときは、probable を含む否定文〈il n'est pas probable que SUB / que IND〉〈SN n'est pas probable〉を用いる。

(34) Il n'est pas probable que ses parents soient / sont au courant.

(35) La participation de Cécile demain n'est pas probable.

improbable を含む肯定文〈il est improbable que SUB〉〈SN est improbable〉を用いることもある。

(34') Il est improbable que ses parents soient au courant.

(35') La participation de Cécile demain est improbable.

論争的な場面では、(34), (35) のような否定文の方をよく用いる傾向があるようだ。Huot (1988, p. 63) のように probable を含む否定文はあまり用いないという説もあるが、もしそれが正しいとすれば、現実のコミュニケーション場面で「ありそうだ」と判断している相手に対して反論するようなことが少ないためだと考えられる。言い換えれば、中間的な度合いの蓋然性についてそれを否定することが意味をもつ場面が少ないためだと考えられる。この点で, possible, certain を用いる場合とは大きく異なることになるが、これに関しては詳しい調査を行なう必要がある。

はじめから蓋然性がかなり低いという評価を表す場合には、〈il est peu probable que SUB〉〈SN est peu probable〉を用いることが多い。peu を possible, certain の場合に用いることがまず無いという事実も興味深い。

### 3. 3 certain

事態の蓋然性について「確実だ」という評価を下していないことを表すときは、certain を含む否定文〈il n'est pas certain que SUB / que IND〉〈SN n'est pas certain〉〈je ne suis pas certain de SN / de INF / que SUB / que IND〉を用いる。

(36) Il n'est pas certain que ses parents soient / sont au courant.

(37) La participation de Cécile demain n'est pas certaine.

(38) Je ne suis pas certain de la participation de Cécile demain.

(39) Je ne suis pas certain de réussir cette fois.

(40) Je ne suis pas certain que vous soyez / êtes allergique aux pollens.

incertain を含む〈SN est incertain〉を用いることはあるが、〈il est incertain que SUB / que IND〉〈je suis incertain de SN / de INF / que SUB / que IND〉を用いることはないようだ。

(36') \*Il est incertain que ses parents soient / sont au courant.

(37') La participation de Cécile demain est incertaine.

(38') ??Je suis incertain de la participation de Cécile demain.

(39') ??Je suis incertain de réussir cette fois.

(40') \*Je suis incertain que vous soyez / êtes allergique aux pollens.

〈SN est incertain〉は、名詞連辞が表すものについて「あやふやだ、はっきりしない、不安定だ」といったことを伝える場面でよく用いるために、文脈によっては紛らわしさのために避けられることもあるようだ。また、〈je suis incertain de SN〉は、事態の蓋然性の評価ではなく、名詞連辞が表すものについて「決断がつかない、迷っている」といったことを伝える場面でも用いられるようである<sup>(6)</sup>。〈il est incertain que SUB / que IND〉の発話例も〈je suis incertain de INF / que SUB / que IND〉の発話例も今のところ見つかっていない<sup>(7)</sup>。いずれにせよ、事態について「蓋然性が低い、不確実だ」を表すことは incertain の基本的な機能とは言えないだろう。

#### 4. おわりに

上では、フランス語で認識的モダリティを表す場合について、possible, probable, certain を比較対照しながら、基本的な意味・統語特性を検討した。その結果、〈je suis X que IND〉の統語形式に用いうる certain とそうでない他の二者とのあいだに大きな差異があることが確かめられた。また、possible も probable もそれぞれにさまざまな特性が認められた。

本稿では, assez, bien, très, absolument, tout à fait などの語句との共起関係に触れる余裕がなかった。また, 否定の場合についても, que 節中の接続法と直説法の使い分け, peu probable は用いるのに peu possible, peu certain はまず用いない, 蓋然性の表現として impossible, improbable は比較的よく用いるのに incertain はあまり用いないなど, 詳しく検討すべき点がまだ多く残されている。さらに, これら三形容詞を含む 〈il est X〉〈je suis certain〉その他のモダリティ・マーカをフランス語話者が待遇表現としてどのように用いているかも, 使用実態の観察にもとづいて検討すべき興味深い問題である。それらは今後の課題としたい。

#### 注

- (1) 英語において類似の機能をもつ形容詞 possible, likely, probable, certain については, 構文選択のメカニズムを解明しようとした田中 (1992) がある。
- (2) インフォーマントとしては, 主な点に関して 1994 年に Olivier Birman 氏 (当時桃山学院大学, 現在関西学院大学) と Jean-Marc Sarale 氏 (京都大学) を, 一部について 1997 年に Georgette Kawai 氏 (甲南女子大学) と Frédérique Takahashi 氏 (大阪日仏センター) を煩わせた。あらためて感謝の意を表したい。
- (3) 接続法の例が probable 単独の場合よりも度合いを示す副詞をとまう assez probable, très probable, plus probable などの場合に多く見られるという事実もこの見方を支持する。
- (4) 曾我 (1997) 参照。
- (5) 反対に, 「ふつう」または「くだけた, やわらかい」言葉づかいの場面では, 〈je suis sûr que IND〉の使用頻度が高い。これは, je だけでなく, 本来, 人の状態 (安心, 確信) を表すことを基本的機能としている sûr を用いることによると考えられる。Discotext には, 〈je suis certain que IND〉の用例が 41 例, 〈je suis sûr que IND〉の用例が 354 例ある。非人称構文の場合は, TOGBY (1982, p. 165) も指摘するように 〈il est certain que IND〉のほうが 〈il est sûr que IND〉よりも使用頻度が高いうえだ。
- (6) 〈je suis incertain de SN〉のかわりに 〈je suis incertain quant à SN / sur SN〉を用いるというインフォーマントもいるが, 事態の蓋然性を表すときのことであるかどうか検討の余地がある。
- (7) 〈il est incertain si IND〉〈je suis incertain si IND〉の発話例はいくつか見られる。

## 主要参考文献

- CHARAUDEAU, P. (1992) : *Grammaire du sens et de l'expression*, Hachette, Paris.
- COHEN, M. (1965) : *Le subjonctif en français contemporain*, SEDES, Paris.
- HUOT, H. (1988) : 《Quelques conditions d'apparition du subjonctif : la notion de classification et le trait[±QU]》, *Cahier Jussieu, numéro spécial : Recherches nouvelles sur le langage*, Univ. de Paris 7, pp. 51-67.
- 木下光一 (1989) : 「フランス語意味論ノート」, 『フランス文化研究』 20, 獨協大学外国語学部, pp. 39-50.
- 曾我祐典 (1996) : 「モダリティ・マーカー je crois, il me semble の用法」, 『年報・フランス研究』 30, 関西学院大学フランス学会, pp. 331-342.
- (1997) : 「フランス語のモダリティ表現」, 『文体論研究』 43, 日本文体論学会, pp. 28-39.
- 田中 実 (1992) : 「意味の認知と構文の選択」, 『人文論究』 42-3, 関西学院大学文学部, pp. 33-48.
- TOGEBY, K. (1982) : *Grammaire française, vol. II : Les Formes Personnelles du Verbe*, Akademisk-Forlag, Copenhagen.

———文学部教授———